

小学校社会科における地理的知識に関する指導方法 のあり方の再検討-教員と児童の乖離の改善に向けて-

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	11
ページ	187-200
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000498/

小学校社会科における地理的知識に関する指導方法のあり方の再検討
—教員と児童の乖離の改善に向けて—

Reconsideration of Ideal Method of Guidance about
Geographical Knowledge in Elementary School Social Studies

菊 地 達 夫

Tatsuo KIKUCHI

北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
第 11 号 (2011)

小学校社会科における地理的知識に関する指導方法のあり方の再検討 —教員と児童の乖離の改善に向けて—

Reconsideration of Ideal Method of Guidance about Geographical Knowledge in Elementary School Social Studies

菊 地 達 夫
Tatsuo KIKUCHI

I はじめに

小学校では、平成23年4月以降、新学習指導要領の完全実施となる。すでに、2年間（平成21年、22年）の移行期間では、いくつかの小学校で新学習指導要領を先行実施している。他方、移行期間において完全実施をしない場合、教科書会社からの補足・追加資料等で対応することになる。現行課程において大きく不足している内容は、「我が国における自分たちの県の位置、47都道府県の名称と位置」、「世界の主な国の名称と位置」、「言語活動」である。T社の場合、「我が国における自分たちの県の位置、47都道府県の名称と位置」について東京都、愛知県、福岡県を事例地とした。また、都道府県の地理的位置を認識できるようなワークシートも用意している。

検定済み教科書の使用は、完全実施となる平成23年4月以降が初めてとなる。検定済み教科書は、これまでの現行課程の教科書と比較して、分量が概ね増えている。検定済み教科書の内容の特色については、別に譲るとして、本稿では、地理的知識に関する指導方法のあり方に注目していきたい。その理由は、移行期間の内容からもわかるように、地理的知識に関する内容を重視していることにある。

世間一般では、地理的知識に関する評価はあまり高くない。その理由として、地理的知識＝暗記という構造がよく挙げられる。他方、寺本（2002）によれば、大学2年生に対して、「自分の小学校のころの地図の思い出」の回想記を書かせた結果、完全に「嫌い」と回答した学生は、少ないと指摘している。地図を「みる・眺める・読む」の行為と地理的知識を暗記するという行為には、多少の違いがありそうだ。すなわち、地理的知識に関する指導方法のあり方が、「好き」と「嫌い」の分岐点になっていると考えられる。加えて、地図指導は、小学校4年生以降で本格化する。よって、小学校段階における指導方法のあり方が重要になってくる。

そこで、地理的知識に関する指導方法のあり方の再検討には、不得意と得意といった学生の意見（経験）に手がかりがあるのではないかと考えた。それゆえ、本稿では、地理的知識の指導方法のあり方について、移行期間の内容を確認した上で、小学校教員を目指す学生に対して地理的知識に関するアンケート調査（学部生2年～4年）を行い、教員と児童の乖離の改善に

向けた手がかりを得ようとするものである。

なお、本稿で使用する地理的知識とは、地理的な位置と名称の認識を指すものに限定する。

Ⅱ 地理的知識の指導方法のあり方とその必要性

1 移行措置の内容（教科書会社T社）における地理的知識の指導例

本節では、教科書会社T社の資料を事例として、地理的知識の指導方法のあり方について確認しておきたい。移行措置の内容と対応（平成23年3月まで）では、①我が国における自分たちの県の位置、47都道府県の名称と位置、②世界の主な国の名称と位置等、③県内の特色ある地域の人々の生活、地域の資源を保護、活用している地域の3つを挙げている。

①では、47都道府県の全体構成、国内における自分たちの県の位置（日本全体の位置）、隣接する県との位置関係（方位や距離）、②では、六大陸と三海洋の名称と位置や広がり、世界の主な国の名称と位置、我が国の国土を構成する北海道、本州、四国、九州、沖縄島、北方領土等の主な島と位置、我が国の領土の北端、南端、東端、西端、日本列島の周りの海、隣接する国々との位置関係、③では、県内の渓谷や森林、高原や湿原、河川や海辺等の自然環境を守り、生かしている地域、県を代表するような歴史の古い建造物や街並み、祭り等の地域の伝統や文化を受け継ぎ保護・活用している地域を取り上げる内容としている。

①では、東京都、愛知県、福岡県を事例地として、授業展開例が示されている。授業展開は、日本全体の中での事例地の位置をまず確認させている。その確認では、方位との関係も重視している。例えば、福岡県の場合、日本全体の中で南側に位置するといった確認である。続いて、47都道府県の構成について学習するようになっていく。具体的には、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州といった地方にまず着目させ、次に地方内に位置する都道府県へと段階的な指導をするようになっていく。また、その指導では、既習内容（例：食べ物の原産地）、観光旅行の経験、ニュース等で登場した地名との結びつきを基本とし、機械的な暗記とならないような工夫がみられる。すなわち、短期間で47都道府県の名称と位置を理解させるのではなく、一定期間の中で繰り返し、指導するような体制となっている。

②では、4観点のねらいとして以下のように示している。関心・意欲・態度では、地球儀と地図帳から、日本の位置、世界の主な国の名称と位置を意欲的に見つけようとし、各国の国旗に関心をもつことができること。思考・判断では、自分が選んだ主な国について、世界地図や地球儀上の位置等からその国の人々の生活の様子を想像することができること。資料活用・表現では、日本と緯度または経度がほぼ同じ位置関係にある国々や日本と関係の深い国々を、作業等を通して調べ、白地図に記入しながら位置と特色を説明することができること。知識・理解では、既習学習である六大陸名、三海洋名、世界地図上・地球儀の構成基礎用語を用いながら、世界の主な国の名称と位置を理解することができること。

これらをふまえた授業展開例では、まず地球儀を活用して、地勢等への興味関心を促し、日

本の位置，近隣諸国の位置と名称について触れるようになっている。次に，他の主要な国について，国旗を活用して興味関心を促し，取り上げた国の位置と名称の理解につなげるような展開となっている。

③では，キーワードを活用した言語活動の有効性を取り上げている。それらは，（１）基礎的・基本的な知識・技能の「習得」におけるキーワードの活用，（２）知識・技能を「活用」して思考・判断・表現する場面におけるキーワードの活用の２つの類型である。（１）では，「習得」の場面において，キーワードを暗記するのではなく，キーワードを用いて，学習内容である社会事象を理解することと説明している。（２）では，７つの場面を想定している。それらは，キーワードを用いて話し合う活動，キーワードを用いて作品をつくる活動，キーワードを地図に表す活動，キーワードを用いてレポートをつくる活動，キーワードを自分の考えをまとめたり，その理由を整理したりする活動，キーワードを用いて関係図をつくる活動，キーワードを用いてインタビューを計画し，実際に行う活動である。

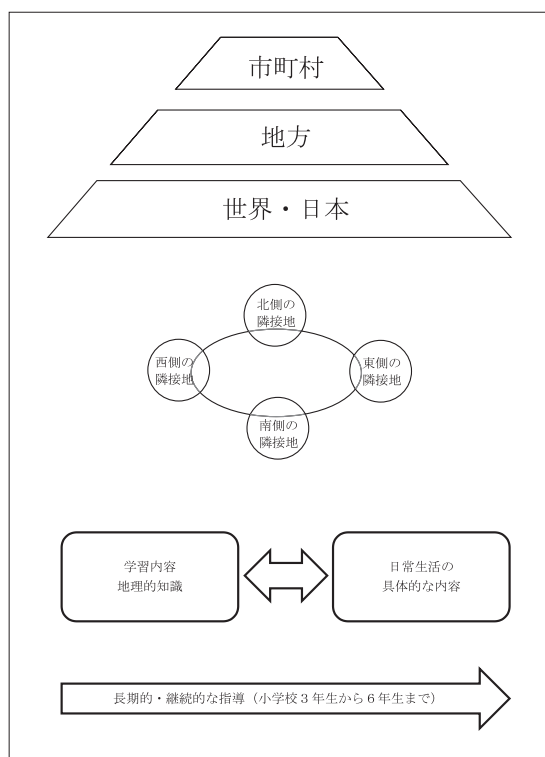
これらの授業展開として，単元の「学習のまとめ」の有効性を挙げている。具体的には，３学年では「市のようす」，４学年では「水はどこから」，５学年では「工業生産と工業地域」，６学年では「３人の武将と全国統一」を事例としたものを示している。

以上から，地理的知識の指導は，全体から特定地域・国を捉える視点，事例地と方位を通じた隣接地域・国を捉える視点，既習内容や日常生活との結びつきを効果的に活かす視点を確認

できた。また，これらの指導は，短期的とならないように長期的・継続的な視点を意識している。すなわち，短期に無味乾燥な暗記を強いて機械的に覚えさせるという，以前のような指導方法に陥らないような工夫をしている。

２ 地理的知識の必要性

それでは，地理的知識は，なぜ必要なのか，具体的な事例を混じえ，確認しておきたい。実は，地理的な位置と名称の認識そのものは，それほど重要ではない。地理教育では，位置認識を通じながら，自然的事象や人文的事象のつながりについて，思考できることを重視している。すなわち，地理的な位置や名称の認識が，最終目標ではない。



第１図 地理的知識の指導方法の視点

1) 歴史教育との関係

世間一般では、地理は空間軸に対して、歴史は時間軸を重視していると理解されている。しかしながら、地理も、歴史も空間軸、時間軸いずれも必要としている。すなわち、空間軸と時間軸の比重が違うにすぎない。

高等学校の場合、地理歴史科として世界史を必修としている。地理と日本史は選択科目となっている。歴史の授業では、地理を履修しない生徒が増えたことで、指導に支障をきたす場面が増えてきた。世界史の場合、地理に負けないくらい地図や地名がよく登場する。しかしながら、生徒には、それら地名の位置認識が不足しており、授業内容の理解に影響している。例えば、合戦や戦争では、関係国（地域）の位置関係や地理的事象がわからないと、原因もわかりにくい。地理的事象として、資源の有無、交易の拠点、気候等が、挙げられる。

同様なことは、公民的内容にも該当する。結果として、地理的知識は、社会的事象を理解する上での基礎的な要素となっている。

2) 日常生活との関係

日常生活では、地理的な位置や名称を理解するために、方位感覚が重要となってくる。すでに述べたように、移行期間の内容では、方位を通じて地理的な位置や名称を理解するような指導方法のあり方が示されている。

例えば、街角には、いろいろな地図をみかける。地図をみる上で大切なことは、起点と方位である。起点がわからないと方位を示すことができない。街角の地図をみて、目的地に行こうとしても、起点がわからないと、進みようがない。道を尋ねた時、どこを起点とした方向かわからないと、北や南の方と言われても迷うだけである。

よって、方位を通じて地理的な位置や名称を理解することは、単なる地理的知識が増えるだけでなく、地理的な見方や考え方を鍛えることにつながり、日常生活に役立つ技能となる。

Ⅲ 地理的知識に関するアンケート結果

本章では、地理的知識に関するアンケート調査の結果（対象者51名 無回答や不明は除く）を、興味・関心・態度、活動・指導に関する経験、模擬授業内容との関連性、3つのカテゴリーに分け、それぞれの検討を行う。なお、アンケートは各項目5段階（5～1）評価で調査したものであり、数値の4・5は高評価、数値の1・2は低評価、数値3は中間評価となる。3つのカテゴリーは、2010年12月に同一時間内で調査したものである。

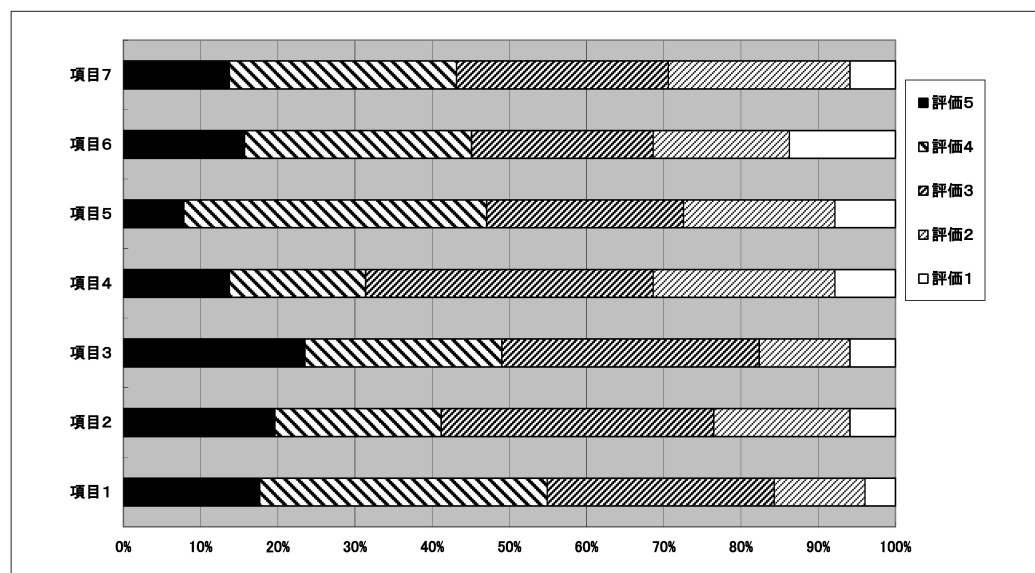
1 地理的知識に関する興味・関心・態度

まず、地理的知識に関する興味・関心・態度について7項目を尋ねた。その結果は、以下のとおりである。地図帳（地図）を見ることへの興味・関心（項目1）は、平均値3.5（5段階

評価、以下同じ)で、関心度の高い4・5が約55%を示した。地球儀を見ることへの興味・関心(項目2)は、平均値3.3で、関心度の高い4・5が約41%を示した。地図帳から探したり、調べたりする作業への興味・関心(項目3)は、平均値3.5で、関心度の高い4・5が約49%を示した。白地図を利用した作業への興味・関心(項目4)は、平均値3.1で、関心度の高い4・5が約16%を示した。国の位置がわからないと地図で調べる姿勢(項目5)は、平均値3.2で、関心度の高い4・5が約47%を示した。地名を覚えること(項目6)は、平均値3.2で、得意度の高い4・5が約45%を示した。地図帳を見る時、地球は球体であることの意識(項目7)は、平均値3.2で、意識度の高い4・5が約43%を示した。

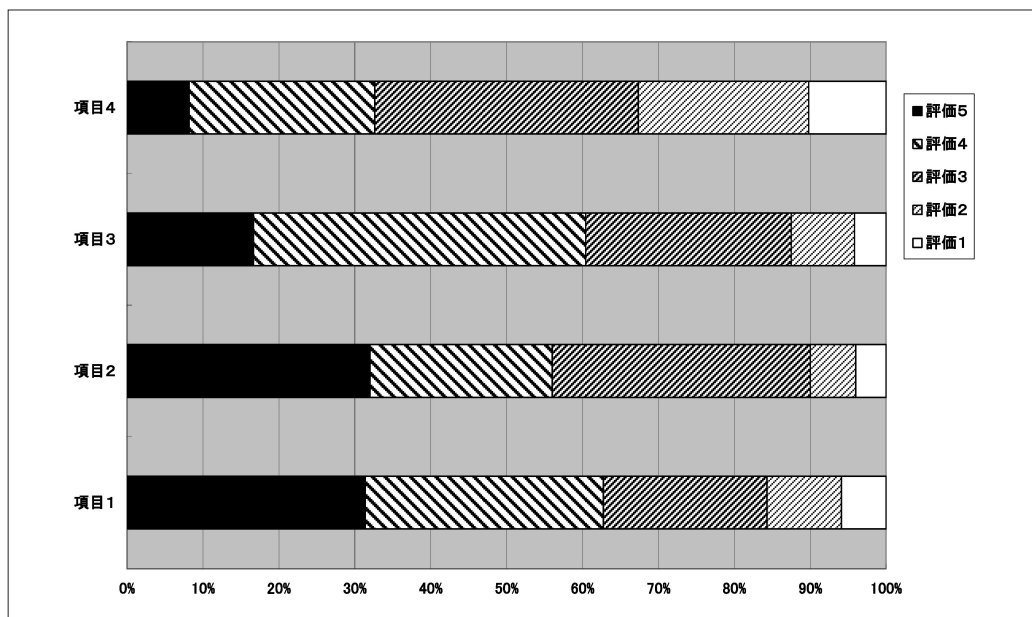
いずれの質問項目でも、平均値3.0以上であり、地理的知識に関する興味・関心・態度は対象者の半数以上であると評価できそうだ。他方、さらに高い興味・関心等があるかという点では、地図帳を見ること以外の質問項目は50%以下となっている。とりわけ、白地図の作業は、16%とかなり低い。よって、項目間の差異がある。また、関心度、得意度、意識度2以下の割合は、いずれも30%以下と低い。他方、いずれの項目でも、中間評価(評価3)の割合が相当数いる。

以上から、地図を閲覧することや地名を覚えることには、興味・関心の高い層がいることを確認できた。一方、白地図の作業に対する興味・関心の高い層は、あまり確認できなかった。すなわち、地図を見ながら、地名を覚えることの方が効果的と考えているようだ。また、白地図の作業は、地名を覚えることに、それほど効果を発揮していないと考えられる。さらに、中間評価の割合が一定数であることは、指導方法のあり方によって、高低する可能性がある判断できる。地理的知識に関する指導方法の善し悪しによって、興味・関心が大きく変わる可能



第2図 地理的知識に関する興味・関心・態度の割合

資料) アンケート調査。



第3図 地理的知識の活用・指導に関する経験の割合
資料) アンケート調査。

性を示唆している。

2 地理的知識の活用・指導に関する経験

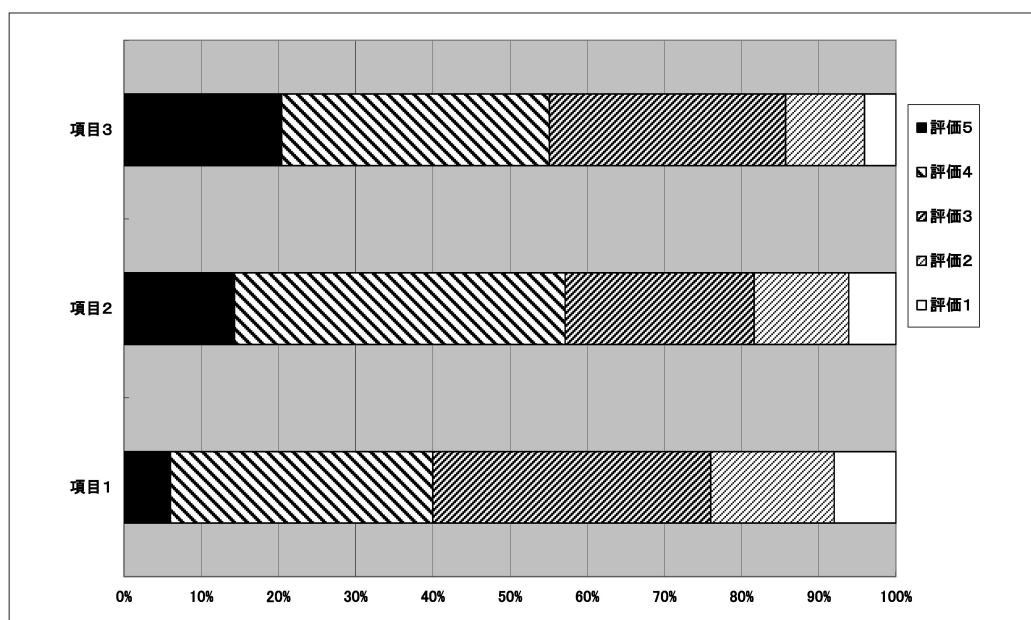
次に、小学校社会科における地理的知識の活用・指導に関する経験について4項目を尋ねた。その結果は、以下のとおりである。地図帳の活用(項目1)は、平均値3.7で、活用度の高い4・5は約63%を示した。調べ学習や作業学習(項目2)は、平均値3.7で、頻度の高い4・5は約55%を示した。地名の位置についての地図での確認(項目3)は、平均値3.4で、頻度の高い4・5は約57%を示した。日常生活への地図の活用(項目4)は、平均値2.9で、活用度の高い4・5は約31%を示した。

学生の小学校時の経験では、地図帳の活用、調べ学習を比較的多く実践していると判断できる。また、地理的位置の確認でも、ある程度の地図の活用を実践していたようである。一方、日常生活への地図の活用は、低調であった。

以上から、地図の活用は、学校内でのそれに限定され、日常生活への応用につながっていないと判断できる。そのため、日常生活でよくみかける地図(例：交通路線図)の活用を通じて、関連性を強く示す必要性がある。

3 模擬授業内容と地理的知識の関連性

最後に、アンケート調査の実施前(2010年12月)、地図や地名を活用した模擬授業(3名・



第4図 模擬授業内容と地理的知識の関連性の割合
資料) アンケート調査。

各20分) を実践していたので、それとの関連性について3項目を尋ねた。その結果は、以下のとおりである。地域比較(北海道と沖縄県)の有効性(項目1)は、平均値3.1で、有効度の高い4・5は約39%を示した。領土問題(北方領土)の興味・関心(項目2)は、平均値3.3で、関心度の高い4・5は約55%を示した。国際協力・貢献(バングラディシュ)に対する興味・関心(項目3)は、平均値3.4で、関心度の高い4・5は約53%を示した。

地域の比較は、地図活用の利点と考えられるが、一定の評価に留まった。一方、領土問題や国際協力・貢献の興味・関心は、必ずしも地図活用の効果と断定できないが、それぞれ効果を高めたものと考えられる。

IV 適性ある地理的知識の指導方法の再検討

本章では、アンケート調査の記述項目として、自己経験をもとに、地図活用における苦手児童に対する指導方法、得意児童に対する指導方法について、意見を求めた。その結果をもとに適性ある地理的知識の指導方法について述べる。

1 苦手児童に対する指導方法の改善

まず、苦手児童に対する指導方法の改善に向けて、学生の意見を参考にしながら、検討を行う。学生の意見は、大まかに5つに区分できる。具体的には、①地図を活用しての調べ学習や

作業学習の取り組み、②地図の空間的範囲の捉え方、③地図活用の指導方法、④地域間比較や事象間の関連性、⑤地図教材・関連教材の工夫である。

①は、さらに地図そのものを活用しての活動と地図を活用して地理的事象を調べる活動に分けることができる。すなわち、学習活動に地図を織り交ぜることで、興味関心を高めることができる考えた。

②は、地図の空間的範囲の捉え方について、身近な地域を範囲とするもの、大まかな主題で表現したもの、身近な地域（学校）からの世界地図、世界地図から身近な地域といった空間的範囲の調整を挙げている。いずれにも共通することは、容易に地理的事象を理解できることである。身近な地域では、普段、目に触れている記憶から地理的事象を捉えることが可能になる。また、大まかな主題は、地理的事象を特定しているので、複雑ではなく、理解しやすい。結果、地理的事象を理解できることが、地図の活用の促進につながると考えた。

③は、地図活用の指導方法について、指導時間・期間の工夫、個人指導の有効性を挙げている。地理的知識を十分に理解できる時間・機会を与えることが、地図活用の面白さに気付かせ、地図そのものの苦手意識を払拭できると考えた。

④は、興味関心のある地理的事象を関連させながら、地図活用を促し、地図の利点に気付かせ、苦手意識を払拭できると考えた。

⑤は、地図と他教材の組み合わせ、地図とゲームの組み合わせを通じて、地図活用の負担を減らし、地理的知識の補完を促すことができると考えた。

いくつかの意見は、すでに述べた移行期間の内容の指導方法でも示されている。また、学生の意見には、十分な指導時間・期間の必要性の指摘があった。新学習指導要領でも、都道府県の名称と位置の認識について、6年生までに習得できれば良いことが示されている。

以上から、適性ある地理的知識の指導方法は、十分な指導時間・期間をかけながら、継続的に取り組むことが有効と考えられる。具体的には、初期段階において、地図に対する興味関心を向上させることに重点を置く。後に空間的範囲を調整しながら、地域の地理的事象との関係を深めていく展開が考えられる。とりわけ、初期段階では、すぐに地図帳を活用するのではなく、絵地図や観光地図といった親しみやすい地図の活用も有益となろう。

結果、地図に長く親しむことで、地理的知識を定着させることができると考えられる。

第1表 地図の苦手な児童に対する指導方法の意見（原文のまま転載）

【 地図を活用しての調べ学習・作業学習 】

- 地名や地図記号などを調べたり、地図帳を使う活動を班で行う。
- 地図で調べることに興味を持たせる。
- 自分の行ってみたい所（外国・国内）はどこにあるか、自分の住んでいる所と共通性はあるか、など調べ学習を行う。
- 地図をうまく活用できる子とペアにし、助け合いながら作業する。教え方も自分の力につ

ながると思う。

- その子の好きなものやことの調べ学習を行うとよいと考える。そうすることによって興味関心が高める。
- 大きな白地図を使って実際に必要な地域のみを取り出して使って作業させる。少しずつ、普通の地図も使う。
- 地図帳などで調べ学習を多くすると良いかと思う。
- 自分だけの地図を作る。
- 自分の住んでいるところや、行ってみたいところなど興味を持ちやすそうなところから調べてみる。
- 地図に慣れるためにも一緒に国名を見て覚えることから始めるとよいと思う。まずは地図を見慣れること。

【 地図の空間的範囲の捉え方 】

- 身近な場所の地図から使って学習を進めたらいいと思った。
- 地元から世界を広げていく。
- 地図を拡大したり、何か他の形に例えて提示するなど。
- 自分の住む町や国の位置を明確にし、その場所をスタート地点にして理解できる範囲を広げていく。
- 経験から、細かい地図だと見たくもないと思っていました。なので最初は広い視野でだんだん狭くしていくことが有効だと思います（大陸→国→地方・市町村）
- 簡単な地図から見られるようにすると良いと思う。
- 少しずつ指導する。まずは学校の中、そして地域、市町村、都道府県、全国、全世界のように。

【 地図活用の指導方法 】

- ゆっくり時間をかけて慣れさせる。
- わからない子には個人的に指導する。
- 1人1人にプリントで地図を配り、人前で教える。
- 毎回答えている子ばかり当てるのではなく、苦手な子によく考えさせて答えてもらう。
- 地図帳を見る習慣をもたせることが有効。
- 基本的な日本の都道府県の場所や世界の位置がわからなくてはつまらないので基礎が大切だと思う。

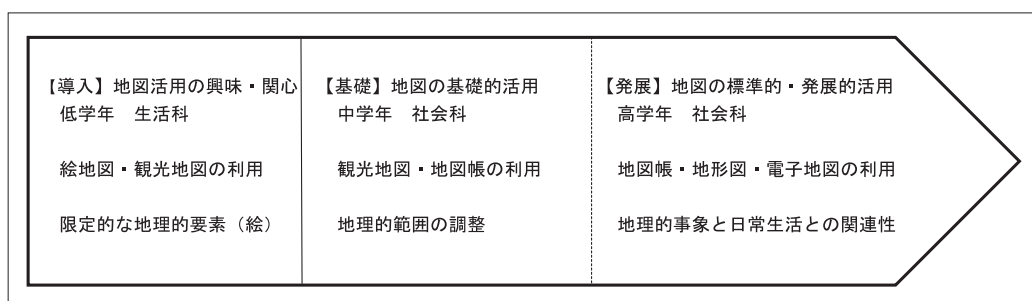
【 地域間比較や事象間の関連性 】

- 他県（国）との違いや産業との関わりを含めた地図を活用することで、自分の住む地域（国）により一層愛着をもつことができると考える。
- その地域の名産品や児童の興味があるものと関連づけたり、景色と結びつけることで位置の認識にもつながると考える。

【 地図教材・関連教材の工夫 】

- 桃鉄などでゲーム感覚。
- 目的をゲーム感覚にすることが重要。
- 地図だけではなく、もっとわかりやすい模型などを用いて指導するとわかりやすいと思う。
- その場所はどういう場所なのかをわかりやすく、その場所の特徴や写真などを用いて地図の他に資料を用いるようにする。

資料) アンケート調査。



第5図 苦手な児童に対する指導方法の改善に向けた内容（概念図）

2 得意児童に対する指導方法の工夫

次に、得意児童に対する指導方法の工夫について、学生の意見を参考にしながら、検討を行う。学生の意見は、その他を除くと、大まかに5つに区分できる。具体的には、①発表・説明、②調べ学習、③地理的事象の関係性、④地図の作製・資料活用、⑤課題・問題の出題である。

①は、他人に説明できるスキルを磨くことで、地理的知識を一層深めることができると考えた。地理的知識の説明は、自己理解があって可能となるので、有益な方法と判断できる。

②は、調べ学習の手法やテーマを工夫することで、地理的知識を一層深めることができると考えた。工夫は、調べ学習を深化させることにつながり、新たな発見を通して、興味関心がより一層高まると判断できる。

③は、地理的事象の関係性を思考することで、立地要因、形成要因等が分かり、地理的知識を一層深めることができると考えた。これも、調べ学習の一部と考えられるが、特定の地理的主題を取り上げているため、②以上の学習成果を期待できる。

④は、地図の作製活動を通じて、地理的知識を一層深めることができると考えた。これも、調べ学習の成果の応用的な側面を担うが、学習活動のまとめとしての地図化の意義は大きい。

⑤は、地理的な問題を通じて、学習意欲を刺激し、地理的知識を一層深めることができると考えた。地理的な問題を解く過程の醍醐味を体感できれば、飛躍的な能力育成につながる。

地図活用の得意な児童は、本人の興味関心に任せ、具体的な指導方法は必要がないという考え方もある。ただ、学力の育成は、適切な学習課題、学習環境を設定することで、さらに引き

延ばせる可能性がある。本人の興味関心に任せれば、学力の育成ができる機会を失いかねない。そのためには、適切な指導方法が必要と考える。

以上から、適性ある地理的知識の指導方法は、これらの方法をつなぎ合わせることが有効と考えられる。具体的には、調べ学習を中心として地理的事象の関係性を思考させ、その成果を地図化し、発表・説明を行うという一連の学習活動である。さらに、それら調べ学習の成果を活かすために、地理的な問題の解決・解答につなげていくものである。このような学習活動は、新学習指導要領においても、地域調べ学習の活動として示されている。

結果、こうした学習活動を積み重ね、中学校や高等学校への飛躍的な発展につなげることが可能となってくる。

第2表 地図の得意な児童に対する指導方法の意見（原文のまま転載）

【 発表・説明 】

- 地図から読み取れることや調べたことなど人に伝わるよう、どうまとめたらいいかかんがえさせる。
- 黒板に書いてもらう→みんなに発表してもらう。
- 調べ学習を通してわからない子に説明できるようになるまでスキルを上げるようにする。

【 調べ学習 】

- 授業以外でも、わからないことがあれば積極的に調べる。
- 地域を比較する活動をする。
- 調べ学習をたくさん行う。
- 自らテーマを決めて調べ学習を行うと良いと考える。
- グーグルマップなどインターネットを活用して詳しくその土地を調べる学習。
- 地図上の様々な情報をより多く吸収できるようにする（高度・特産品等）
- 緯度の同じ国、経度の同じ国を調べてみる。
- 知らない国を探したり、珍しい名前の国を探す。
- その地域でとれる物などをより詳しく地図に加えながら、その地域の特産物も学んでいく。

【 地理的事象の関係性 】

- リアス式海岸や湖、山などが何故そこにできたのかを考えさせることで、地理的知識だけではなくその背景にある、様々な社会的事象にも興味をもたせることができる。
- 白地図でおよその位置がわかることや、地図をみてその地域や国の特色もともに学ぶ。
- 地図を通して考えられる社会の動きや疑問を解決していくことでより他の分野へつなげることができる。
- まず日本地理を学習し、そこから世界地図へと移し、日本と世界の地理を比較する。

【 地図の作製・資料活用 】

- 自分の理想の地図をつくる。

- 地図パズルなどをつくって、持っている知識を忘れないように定着させる。
- 地図やグラフなど様々な資料を活用。
- 近隣の地図を作る。

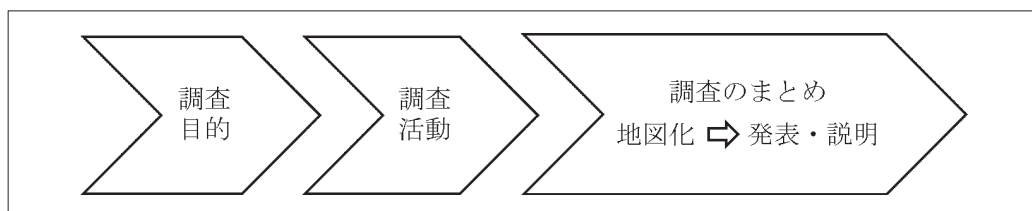
【 課題・問題の出題 】

- さらに難しい問題をだす。得意な児童と苦手な児童をペアにする。
- どんどん課題をだしていく。
- 「どのくらい覚えられるか」「何個覚えたか」誰にも負けないように得意にさせる。得意が苦手にならないようにする。
- もっと高度なものをみせる。
- 地図を見ながら白紙に書いて知識を深めるなど、それを伸ばすように指導する。
- クイズにしてみる。

【 その他 】

- 特に指導はしないで、ほめればよいと思います。
- 日常で活かせるような内容。

資料) アンケート調査。



第6図 得意な児童に対する指導方法の工夫に向けた内容（調べ学習を中心とした概念図）

V おわりに

本稿は、地理的知識の指導方法のあり方について、移行期間の内容を確認した上で、小学校教員を目指す学生に対して地理的知識に関するアンケート調査（学部生2年～4年）を行い、教員と児童の乖離の改善に向けた手がかりを再検討しようとするものであった。

以下では、第Ⅱ章以降のまとめをしておく。第Ⅱ章では、移行期間における内容と具体的な指導方法について、T社の資料を参考に確認した。続いて、地理的知識の必要性について、歴史教育との関連、日常生活との関連を通じて、具体的な事例を取り上げながら述べた。

第Ⅲ章では、学生のアンケート結果を用いて、地理的知識に関する興味・関心・態度、活動・指導の経験、模擬授業内容との関連について、5段階の評価を求めた。その結果、地理的知識に関する興味・関心・態度は、概ねの項目で半数程度の高評価を得た。また、いずれの項目も、低評価は少ないものの、一定数の中間評価がいることもわかった。それゆえ、地理的知識に関

する指導方法のあり方によって、中間評価が高低する可能性がある。次に、活動・指導の経験では、小学校段階において、地図の活用を比較的多く取り入れていることを確認できた。一方で、日常生活への地図の活用は、あまりされていない実態も浮き彫りとなった。最後に、模擬授業内容との関連性では、地図の活用について、ある程度の効果を認めることができた。

第Ⅳ章では、学生のアンケート結果（記述式）を用いて、苦手児童に対する指導方法の改善と得意児童に対する指導方法の工夫について検討をした。その結果、いずれも、大まかに5つに区分できた。苦手児童に対する指導方法の改善では、十分な指導時間・期間を確保しつつ、継続的に取り組むことが有効と考えられた。とりわけ、初期段階において、いかに地図に対する興味関心を向上させ、苦手意識を払拭できるか、この点が重要となる。また、中期段階以降では、空間的範囲の調整をしながら、地域の地理的事象との関係性に結び付けられるか、この点が重要となる。いずれも、機械的な暗記とならないような指導方法を期待している。得意児童に対する指導方法の工夫では、調べ学習を中心としながら一連の学習活動につなげることが有効と考えられた。具体的には、調べる活動の中で、地域の地理的事象との関係性を思考させ、その成果を地図化し、発表・説明につなげていこうとするものである。

以上の結果を通じて、新学習指導要領やT社で示している指導方法と学生の記述式の意見を比べると、かなりの部分で類似した内容を確認できた。すなわち、今回の地理的知識に関する指導方法は、教員と児童の乖離の改善に、ある程度の効果があると判断できる。とりわけ、第Ⅲ章でみたように、対象学生は、地理的知識の興味・関心・態度に著しい高い割合を示していない。また、低い割合は少ないものの、中間評価に一定の割合がいる。このことから、学生の意見としての指導方法の改善や工夫は、自己の経験を通じた願望や要望を含んでいると解釈できる。よって、それらの内容が、新学習指導要領やT社の指導方法に類似している点は改善に向けての一助となる。

地理的知識の定着は、暗記を強いる学習活動の結果としてではなく、地図の活用を通じての自然的な認識につながる学習活動に求めている。

中学年における地図活用では、第3学年の段階で観光地図や絵地図等の平易な地図を用いて、地図に対する抵抗感を払拭しておくことが大切となる。それを経て、第4学年以降における地図帳の活用につなげていきたい。また、地図帳も、いきなり地勢図を活用するのではなく、平易な主題図を併用しながら、徐々に日本の地方図や世界の州地図（地勢図）に移行するような展開が望まれる。さらに、拡大版地図帳を用いて、綿密な地理的事象の圧迫感を和らげる方法も有効と思われる。

文 献

菊地達夫（2009）：新学習指導要領における小学校社会の地理的内容とその特色，生涯学習研究と実践第12号，pp.69-80.

菊地達夫（2009）：中学校社会科地理的分野における地図活用のあり方と方向性，苫小牧駒澤大学紀要第21号，pp. 61-79.

菊地達夫（2010）：地理歴史科地理 A・B における内容と特色，北翔大学生涯学習システム学部研究紀要第10号，pp. 167-175.

地理教育研究会編（2010）：『ニッポンまるかじり』講談社.

寺本 潔（2002）：『社会科の基礎・基本 地図の学力』明治図書.

松田博康（2009）：『移行期に進める新たな社会科の学習指導』東京書籍.

宮嶋裕一（2010）：中学生における日本地理の知識，日本地理教育研究会第49回旭川大会発表資料.

文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説 社会編』株式会社東洋出版社.

文部科学省（2008）：『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版社.

原田智仁編（2010）：『高等学校新学習指導要領の展開 地理歴史編』明治図書.

安部卓也（2010）：中・高生の空間認識について，全国地理教育学会発表要旨集第4号，p. 11.

吉田和義（2004）：『地理学習を面白くする授業アイデア』明治図書.